

## ペルー北部海岸地方の信仰と習俗にまつわる予備的考察：パイタにおける聖ペドロと聖パブロの祝祭をめぐって

河邊真次（三重大学非常勤講師）

キーワード： ママコーチャ、聖ペドロと聖パブロの祝祭、民間伝承、災害と信仰

### Un estudio preliminar sobre creencias y costumbres en el litoral del norte peruano: en torno a la fiesta de San Pedro y San Pablo en Paita

SHINJI KAWABE (Mie University)

Keywords: Mamacocha, fiesta de San Pedro y San Pablo, tradiciones populares, desastres y creencias

#### はじめに

ピウラ県太平洋沿岸地域には先インカ期より先住民族タリヤン (los tallanes) が居住し、モチエやチムーに從属しながらその社会文化的影響を受けてきた。インカ期には、ワイナ・カパックが沿岸地方の諸部族を帰順させて太陽信仰を広めたが、海岸地帯の先住民族の間では一般にママコーチャ (Mamacocha) すなわち「母なる海」が崇拝されていたことが複数の年代記に記されている [ガルシラーソ 1986[1963]: 66-67 他]。

他方、当該地域の住民の間では現在、ママコーチャなる語を耳にすることはなく、海が直接的な信仰対象として語られることもない。このことは、インカ期の神格のひとつであるパチャママ (Pachamama) が、程度の差こそあれ山岳地方で今なお信仰されていることと対照的である。本報告では、海にまつわる信仰の現代的諸相を解明するための予備的な考察として、沿岸地域における宗教的信仰の変遷とその実践状況の整理を目的とする。その一事例として、ピウラ県パイタ地区 (以下、パイタ) 及びその周辺村落の漁師たちから絶大な崇敬を集める聖ペドロと聖パブロの祝祭をめぐる習俗と伝承をとりあげる。

#### 1. パイタの聖ペドロと聖パブロの祝祭

ペルー太平洋岸の市町村では、毎年6月29日にカトリックの守護聖人である聖ペドロと聖パブロの祝祭が広く祝われる。とりわけ、聖ペドロはイエスの第一の弟子かつローマ教会初代教皇であり、弟子となる以前の本業が漁師だったこと、イエスから「人間を漁 (すなど) る漁師」になるという使命を授かったことなどの故事を通

じて、海に生きる漁師たちの守護聖人として篤い信仰を受けている。

Rivas Castillo [2002:8-9] によれば、パイタにおける聖ペドロと聖パブロの祝祭はおよそ2ヶ月前から準備が始まる。6月26日にはパイタ西部に位置するラ・プンタ区 (La Punta) に仮設される礼拝所に両聖人像が運ばれ、多くの信者から絶え間ない訪問を受ける。また、礼拝所の入り口には巨大なアーチが立てられ、両聖人にはさまざまな供物が捧げられる。6月29日は早朝から両聖人像を輿に載せて市内を巡る聖行列が行われる。パイタの教区教会でミサを受けた後、両聖人像は埠頭で装飾を施された小型漁船に載せられ、他の漁船を従えて「湾内クルーズ (recorrido marítimo)」に出発する。沖合では海で命を落とした漁師たちの追悼のための花冠が海に投げられ、祝祭の後援者や船主たちは十分な飲食物を参加者に提供する。午後3時には両聖人像が船から降ろされ、ラ・プンタ区の礼拝堂まで再度聖行列が行われる。その後、夕刻から深夜かけて飲食を伴う華やかな祭りの雰囲気包まれる。

#### 2. カトリック信仰と海との関連

パイタでは、1728年に当地に甚大な被害をもたらした数十年に一度クラスのエルニーニョ現象が、両聖人像の起源にまつわる伝承と関連づけられている。その中では、パイタの一漁村クニユス (Cuñús) が大波に飲み込まれることを住民に告げた聖母マリアの指示のもとに両聖像が制作され、奇跡的に完成した両聖像とともに住民が海路でラ・プンタ区へと移住を果たした歴史が語られる [Rivas Castillo 2003:5]。その意味で、

パイタの「湾内クルーズ」はその逃避行の追体験であり、また陸路での聖行列はラ・プンタへと逃れた人々が、埠頭の東にあったとされるクニユスへと象徴的に帰還する行事であると言える。

加えて、パイタは18世紀半ばまで英国私掠船の襲撃を断続的に受けてきた。中でも1741年のジョージ・アンソン (George Anson) の襲撃はパイタにもっとも深い傷跡を残した人的災害のひとつで、その歴史的事件はパイタの守護者であるメルセデスの聖母の伝承とともに現代に伝えられる。伝承によれば、同年11月24日のパイタ襲撃の際、アンソンは教会に侵入し、他の戦利品とともに聖母像を船に持ち帰った。すると、常に穏やかなパイタ湾が突如として荒れ狂い、アンソンたちは海を鎮めるために慌てて聖母像を海に投げ捨てて逃走した。翌朝、地元の漁師たちが海岸に打ち上げられた聖母像を発見し、荘厳な行列をもって聖母像を教会へと運んだ。住民は聖母がパイタを守ったのだと伝えあい、それ以降、聖母への信仰を強くしたのだという。

### 3. 考察とまとめ：災害と信仰

これら二つの伝承から、海に対する沿岸住民の態度がうかがえる。前者では、荒れ狂う海は自然の猛威としてパイタ住民に襲い掛かり、後者ではその猛威が敵対者である英国海賊に対して降りかかるという違いはあるものの、海は人知の及ばない力をもつ存在であるという認識に変わりはない。Buse de la Guerra [1977:618] は、このような海に対する沿岸住民の畏怖の感情は原初的なものであり、その猛威は神ないし海に関連のある何らかの神格の怒りの表れであると分析する。重要なことは、自然災害であれ人的災害であれ、海をめぐる危機的状況において加護を求め、良い結果に感謝をささげる対象が、植民地時代を経て海そのものからカトリックの神や聖人に置き換わってきた点であろう。

歴史的に見ると、ペルー沿岸地域では、人々は太古の昔から生計を支え、時に災害をもたらす海を崇拜し、畏れてきたことは多くの考古学的証拠や年代記記述から明らかである。また、Buse de la Guerra は、海の神の優位性については沿岸

住民の生計を支える経済的な性格と地理的な海との近さをから説明されるとし、その理由は海岸地方の諸民族が海に「依存し、彼らの経済を支配していたから」であるとしている [ibid.:589]。

その後、16世紀にスペイン人の到来とともに導入されたカトリックは、土着宗教を排除・撲滅しながらこの地域でも広く布教された。その過程で土着の神格はカトリックの神や聖母、聖人と習合ないし序列化される形で再解釈されてきた。結果として、海は依然としてパイタ住民、とりわけ漁師にとって畏怖の感情と経済的恩恵をもたらす源泉であり続けている一方で、「母なる海」ママコーチャはその名と神性を失い、聖ペドロやメルセデスの聖母を介して間接的に畏敬の念や感謝が向けられる自然的存在へと定位されてきたものと理解できよう。

さらに、近年ではプロテスタント／福音派 (以下、福音派) の伸長がパイタ地区住民の宗教生活を大きく変えてきた要因のひとつとなっている。福音派の宗教実践においてはさまざまな制約があり、とりわけ土着信仰的要素をもつ慣習やカトリック的慣習の禁止が特徴的である。実際、地区最大の崇敬対象であるメルセデスの聖母の祝祭が、集落によっては廃止された事例もある。このように、福音派が地区内で信者を増やすことで、カトリックのみならず先スペイン期の土着信仰的要素が表向きには徐々に廃れ、今後ますます水面下に追いやられていく可能性はあろう。この点については現在もなお進行中の宗教動態でもあり、今後さらに注目していきたい。

#### 【主要参考文献】

- ガルシラーソ・デ・ラ・ベガ、インカ、1986[1963]、『インカ皇統記』二 (大航海時代叢書エクストラ・シリーズII)、牛島信明訳、岩波書店。
- Buse de la Guerra, Hermann, 1977, *Historia marítima del Perú*, Tomo II-Vol.1. Instituto de Estudios Historico-Marítimos del Perú, Lima.
- Rivas Castillo, Vidal, 2002, *El folklore: Tradiciones*. Edición privada, Perú.
- Rivas Castillo, Vidal, 2003, *El folklore: Leyendas paitenas*. Edición privada, Perú.